

USB AUDIO クラス・コンプライント・モードでの録音ソフトの使い方

UDA2 基板は ASIO に準拠したデバイスですので、ASIO から利用できる録音ソフトを使用します。

① DSD 録音

DSD 録音では「recorder」ソフトウェアを使ってください。2014 年の春時点では DSD を録音できる市販の ASIO ソフトウェアは存在しておりません。



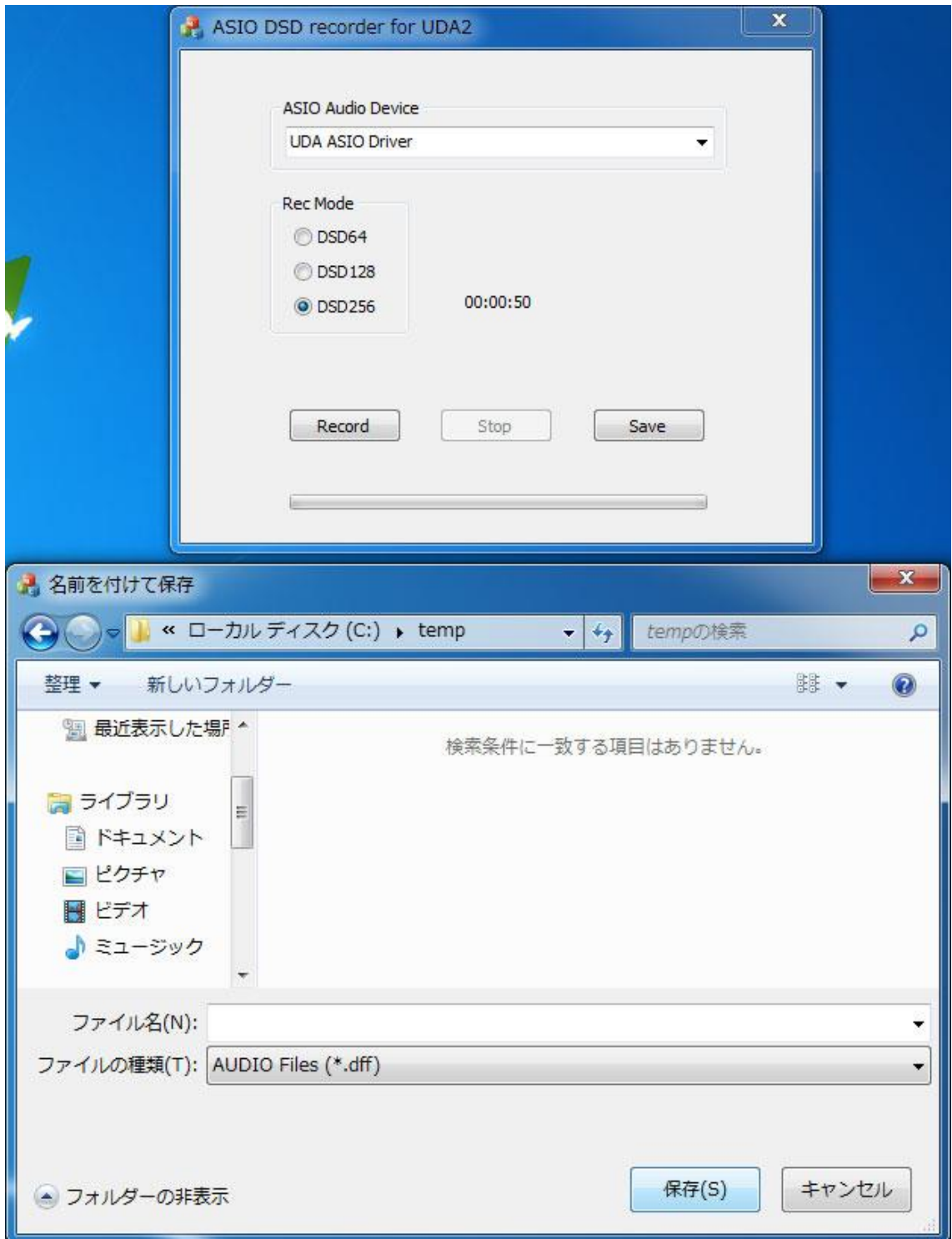
ソフトを立ち上げた後に上部のリストボックスから「UDA ASIO Driver」を選択してください。これで録音デバイスとして UDA2 録音再生基板が使用されます。

次に、録音する DSD のサンプリングレートを UDA2 基板に入力する DSD 信号のレートに合わせます。UDA2 録音再生基板は DSD64/128 は「DSD-RAW」、「SDIF-3」の両フォーマットを受け付けます。DSD256 に関しては「DSD-RAW」のみを受け付けます。DSD 入力時のワードクロック入力には 44.1kHz のクロックを入力します。「Record」ボタンを押すと録音が始まります。

「recorder」ソフトウェアは UDA2 基板の入力ポート IN1/IN2 から入力した信号を暗黙的に OUT1/OUT2 へ返しますので、基板に接続されたレベルメータ基板を駆動します。録音レベルはレベルメータ基板を頼りに合わせます。



録音が始まるとカウンターが動きます。「Stop」ボタンを押すと録音が終了します。
録音を終了したら速やかに「Save」ボタンを押して DSDIFF ファイルに保存します。



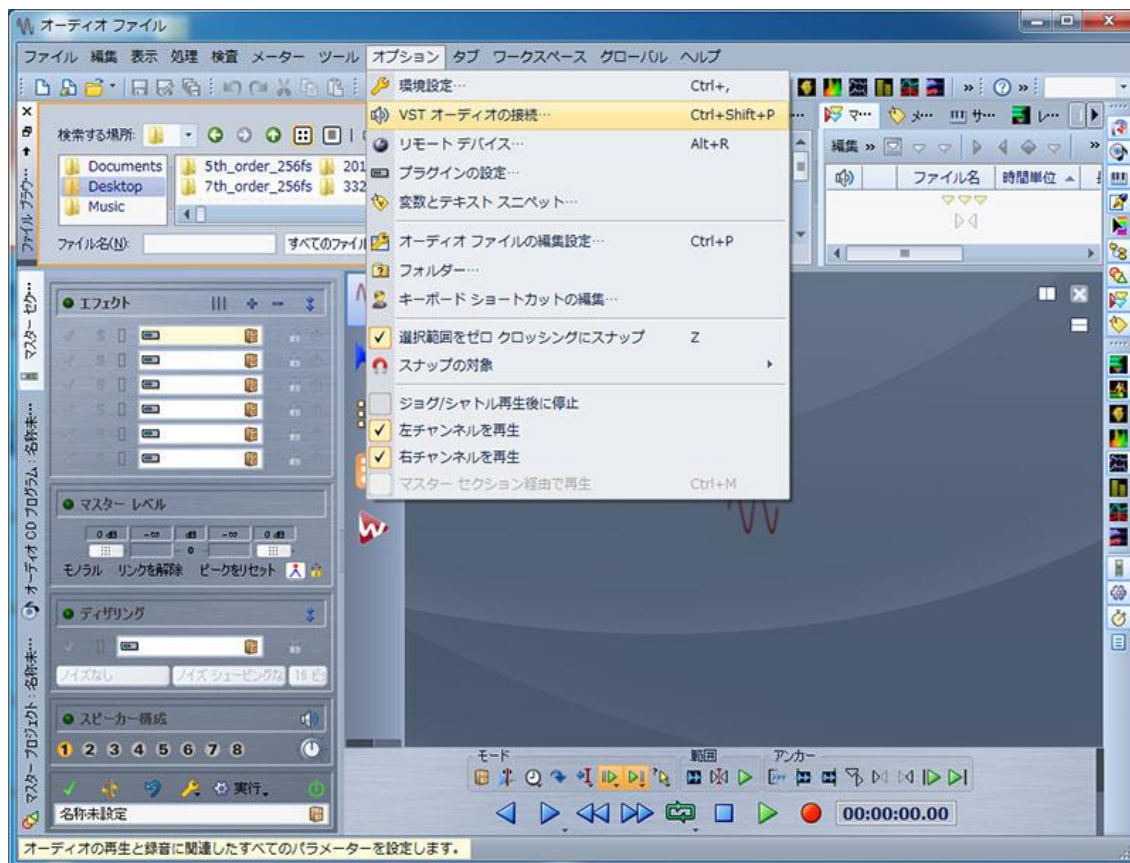
② PCM 録音

クラス・コンプライアント・モードにおいて UDA2 録音再生基板は SDIF-2(PCM)信号を録音することができます。AT1201 基板は BNC 端子から 384kHz までの PCM 信号を出力します。なお、SDIF-2 信号のワードクロックは、サンプリング周波数の基底周波数 (44.1/48kHz) に等しい周波数となりますが、AT1201 基板はサンプリング周波数と同じワードクロックを出力し、UDA2 録音再生基板はどちらのクロックも受けて録音できます。

ASIO 対応ソフトから UDA2 録音再生基板を使うことができます。

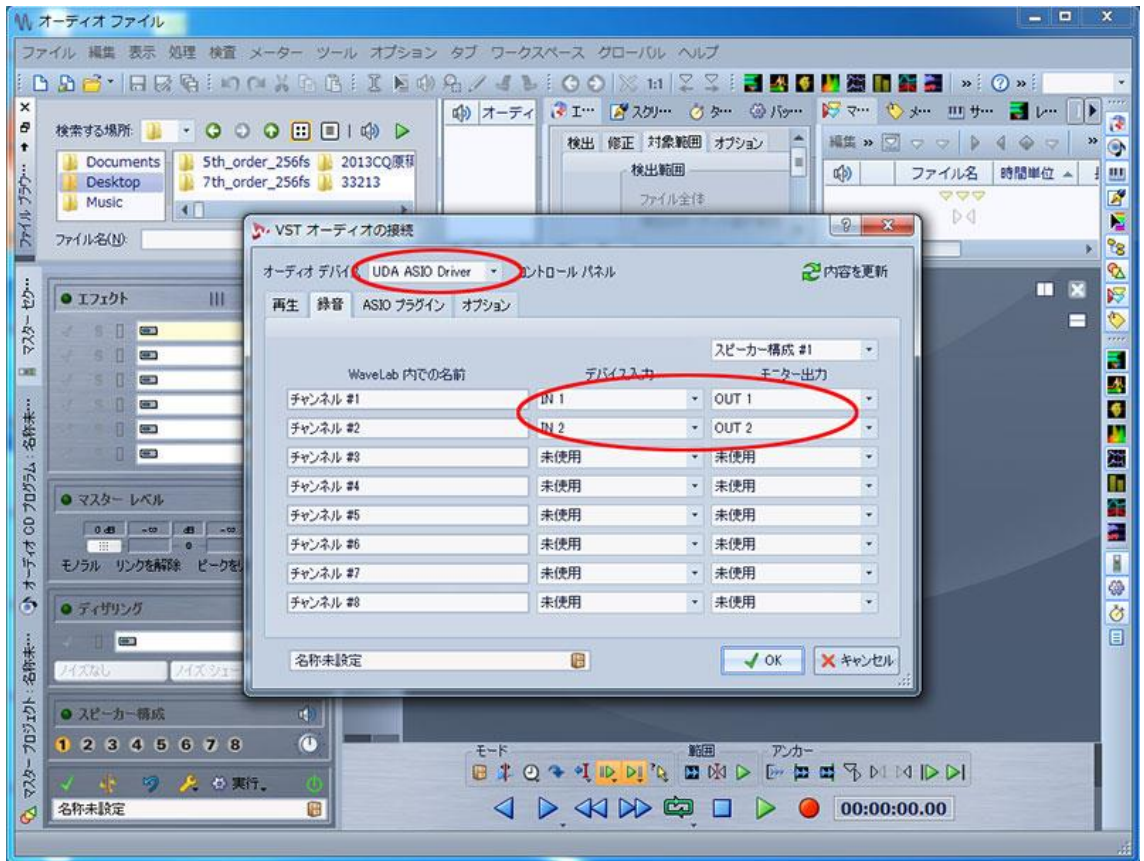
1. WaveLab8

「オプション」→「VST オーディオの接続...」を選択し、

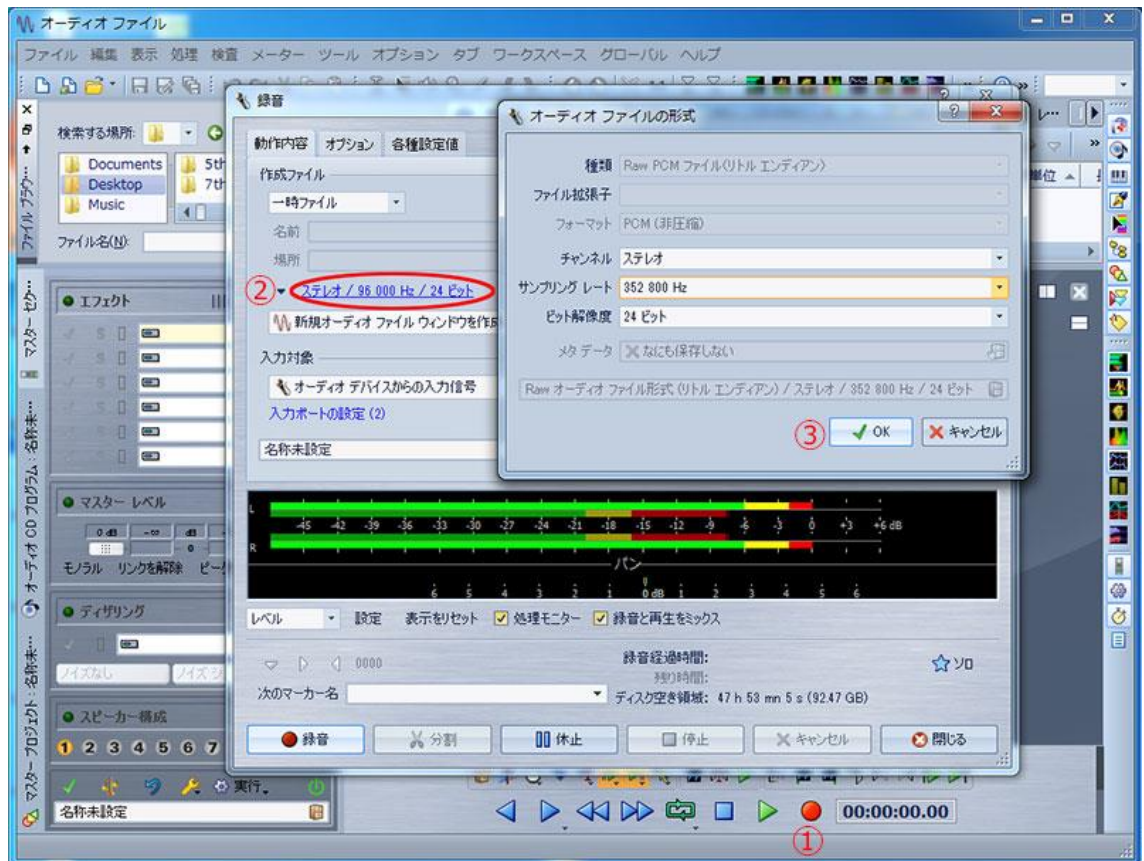


現れたダイアログボックスの赤丸で囲んだ部分を次の図のとおり選択します。これによって UDA2 録音再生基板の出力デバイスに、録音している信号がリアルタイムで出力※されるようになります (レベルメータ基板も動作します)。

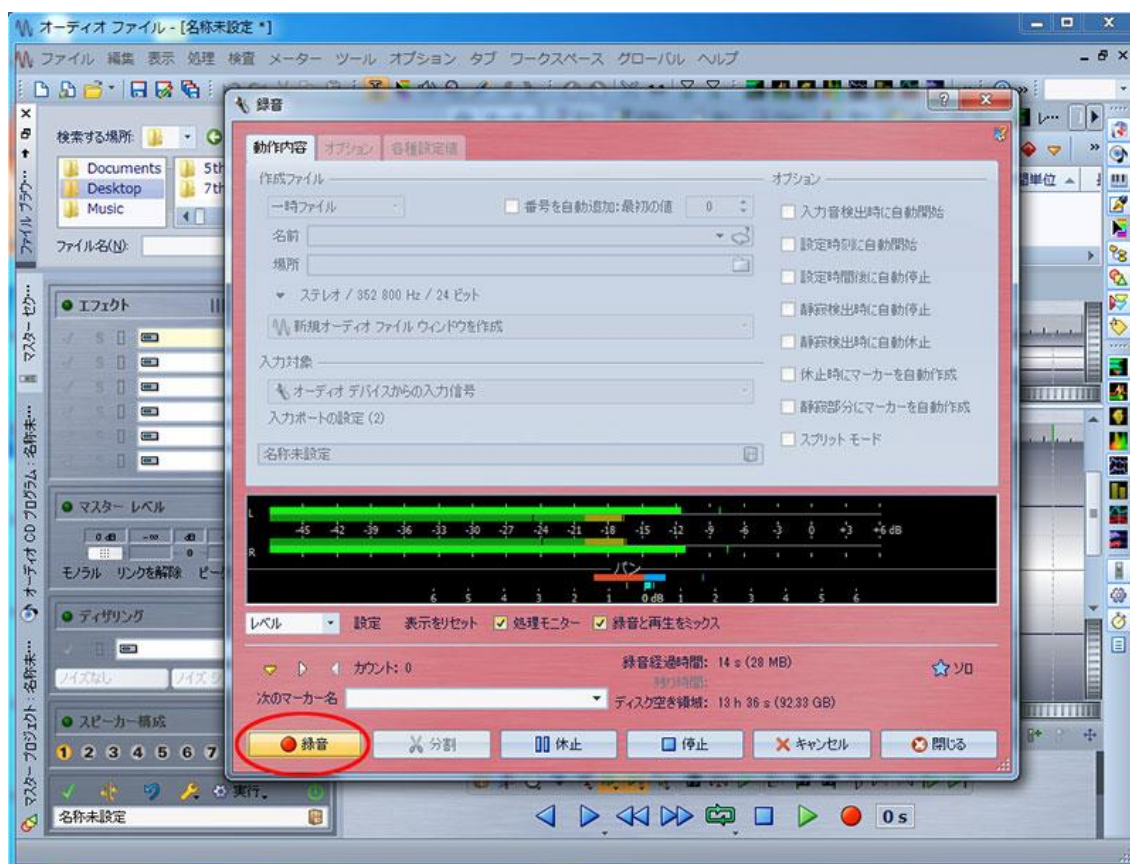
※PCM 信号の BNC 入力(シリアル入力)は SDIF-2 ですが、BNC 出力(シリアル出力)は I2S になります。



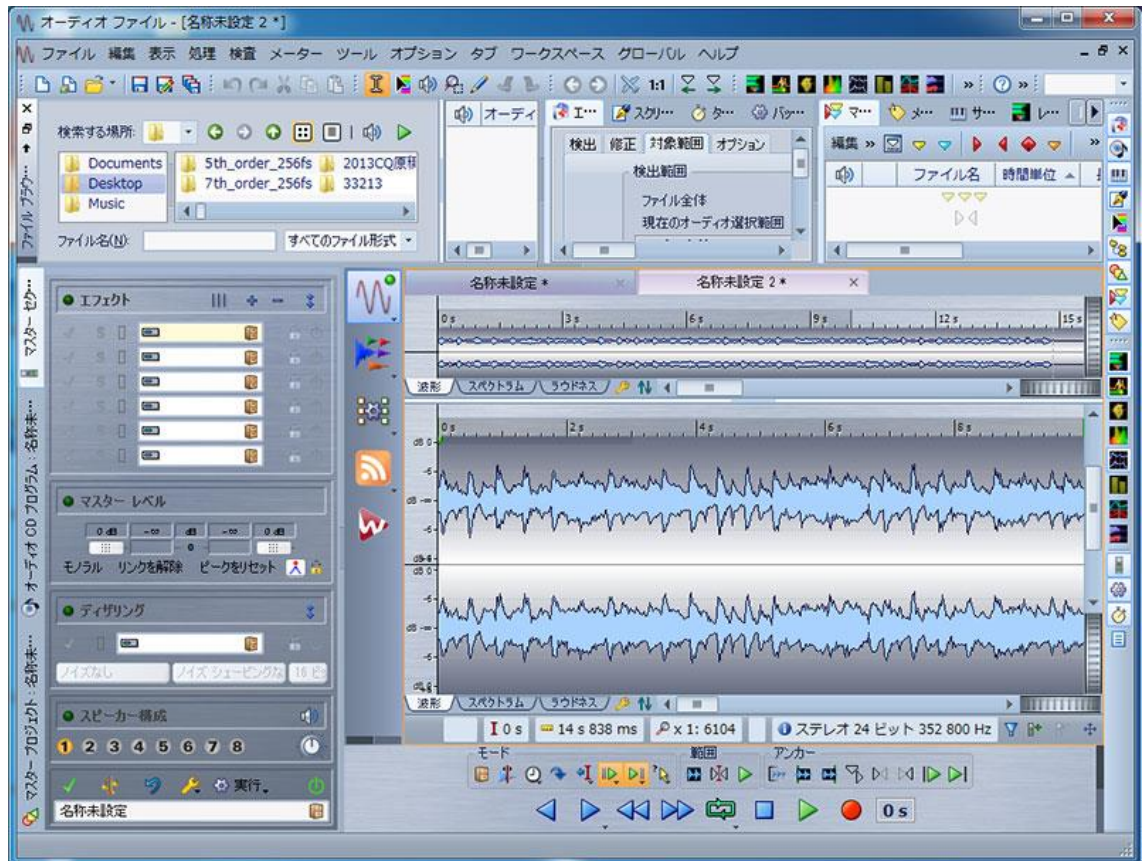
続いて最下部の録音ボタンを押し (①)、現れた「録音」ダイアログボックスで青地の部分をクリックして (②)「オーディオファイルの形式」ダイアログボックス上で入力信号に合ったサンプリング周波数を指定します (③)。



「録音」ダイアログボックスの最下部にある「録音」ボタンを押すと録音が始まります。

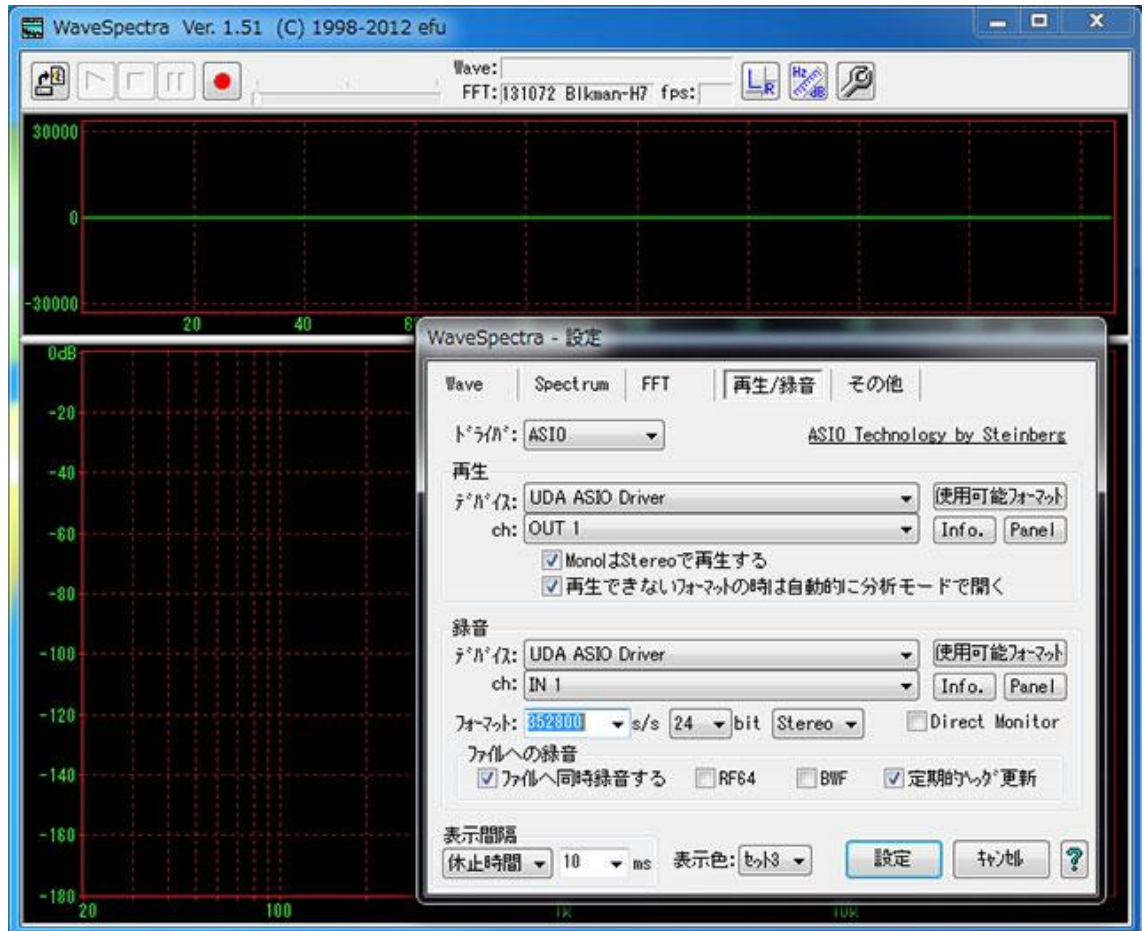


「停止」ボタンを押し、「閉じる」ボタンを押してダイアログを閉じるとタイムラインにPCM波形が現れます。



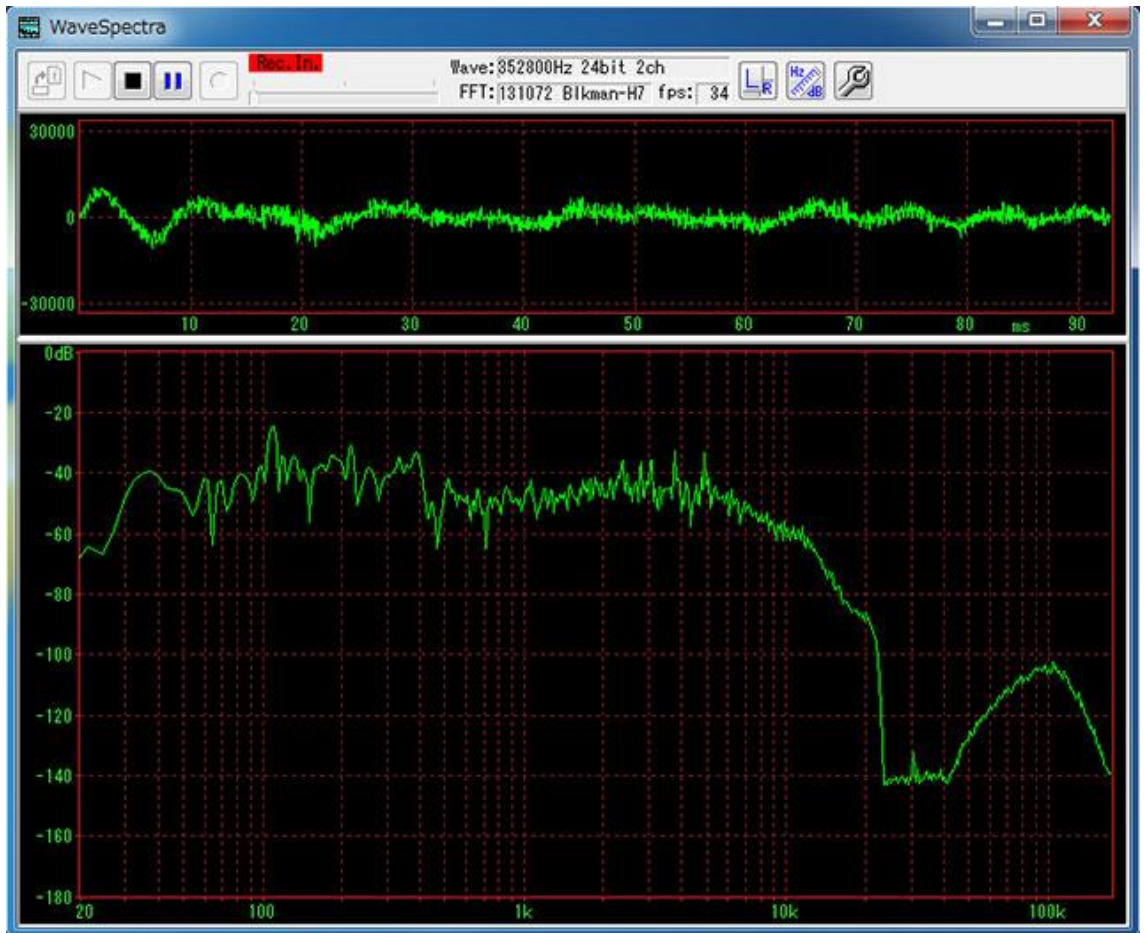
2. WaveSpectra

WaveSpectra では ASIO デバイスを選択して 384kHz までの録音を行うことが可能です。



ツールバーの「設定」ボタンを押して現れたダイアログを上図のように設定し、ツールバーの「録音」ボタンを押すと録音が始まります。

ただし、WaveSpectra の場合、UDA2 録音再生基板の IN1/IN2 を経由して PC へ入力した録音信号を同時に OUT1/OUT2 へリダイレクトしてモニタすることはできませんので、録音中に基板のレベルメータは動作しません。WaveSpectra にレベルメータはありませんので、波形ウィンドウやスペクトラムを見ながらのレベル設定が必要です。



3. Sound Studio (Mac)

起動したら「Sound Studio」環境設定ダイアログを開いて次の図のとおり設定します。



「モニター入力から出力にプレイスルー」にチェックを入れるとレベルメータ基板も動作します。